

英会話（英語教育） に感じて

川崎敏安

学生部学生課

断り切れない関係者から、筑波フォーラム57号を読んで何か書いてくれという依頼があったため、やむなく寄稿することになった。

それはさておき、前号は、「大学の語学教育の姿を、英語を中心として語る」という特集だったが、私はそれに対する感想というより、少し視野を変え、日本の学校教育における英会話（英語教育）の導入について意見を述べたい。

人生80年時代を折り返した私にとっては、留学生課や歓楽街での英会話以外、あまり接する機会もなく生きてきた。しかし、言語能力の発達から考えると、日本の学校教育における英会話は、中学校からではなく、小学校から始めてもよいと思う。なぜなら、子供は2・3歳で単語を覚え、4・5歳になるとごく自然に会話ができるようになるからである。それは英語でも日本語でも同じで、できるだけ早い段階で始めたほうがより会話能

力が身につくと考えられることから、せめて小学校低学年から「遊びの中での英会話」を導入すべきであると思う。結局、言葉を休得することからすれば、今の中学校から始まる英語教育では、容易に外国人とコミュニケーションがはかれるようになるとは思われないのである。

さらに、少子化が進んでいる日本の社会構造からして、将来、外国からの労働力に頼らずには日本社会が成り立たないのは目に見えている。そうなると、英語が国際共通語であるか否かは別にして、英会話の重要性がますます高まることは必然である。

以上のことから、「遊びの中での英会話」を小学校低学年から採り入れる必要があるのではないだろうか。日本語教育が疎かになるとか、「遊びの中での英会話」など義務教育では不要といった意見もあろう。しかし、私の体験だけでなく、外国を旅行した人々に聞けば、世界中、だいたい英語が話せれば意思疎通ができるのとことであり、やはり英会話ができるようなカリキュラムが求められるだろう。

私だって、2・3歳から英会話を始めていたら、もっと違った人生を楽しめたかもしれない？

（かわさきとしやす）